



東日本大震災の被災地を訪ねて

校長 出口 晴基

この6月に東日本大震災の被災地宮城県を訪ねる機会を得ました。被災地へは、地震発生から5か月が経った8月に初めて訪問しました。被災地の様子に大きな衝撃を受けました。そして今回、8年が経過した街、震災によって壊れた建物など、被災の記憶や教訓を後世に伝える建造物の震災遺構をまわり、貴重なお話を伺うことができました。

被災地をまわる間、案内をしていただいた地元の方のお話は、心に深く受け止めました。震災から8年が経ってようやく話せるようになったと、観光バスガイドの経験やこれまでの活動を活かし、周囲の要請もあり、語り部として語りつないでいくことを決意されたということです。ベテランガイドのその女性は当日、自身の車で高齢者の通院の送迎のボランティアの最中で、車ごと津波に流されたということでした。ドアは水の圧力で開けることができず、4つの窓をやっと開けたそうです。窓の開け閉めが手動式であった事が、幸いしていたと……。車は、運よくそのまま浮かび、大きなものともぶつかること無く、屋根の上に逃げた人たちに引き上げてもらったそうです。車内にいた高齢者の方も助かったそうです。この間の必死の行動の様子はもちろん、当時の思いや感じたこともお話しいただきました。

石巻市立大川小学校では、校内にいた児童78名中74名が犠牲になりました。大川小学校は、新北上川河口から約5kmの距離にあり、標高は約1mです。すぐ近くには、子どもたちが遊んだり、シイタケ栽培で登ったりした裏山(標高約75m)がありました。しかし、児童らは、川に架かる橋のたもとの三角地帯(標高7m弱の丘)に集まっていました。「裏山に逃げよう」という声も上がったのですが……。津波が押し寄せました。

裏山に登っていれば、避難していれば多くの命が助かったと感じました。在校児童全員が無事だった別の石巻市立小学校もあります。この違いは、何だったのでしょ。

今回の訪問で見聞きしたことは、大変大きく意義のある経験となりました。いざという時、学校の判断はとても重要です。判断をするためには、様々な準備が必要です、確かな情報や歴史を知ることによって正しい判断ができると思います。学校の危機管理の重大性を改めて感じました。今後も保護者地域の皆様とともに、児童生徒の安全を第一に連携・協働を深めてまいります。

「閉庁期間」のお知らせ

- ◆ 期間 令和元年 8月3日(土)～16日(金)
- ◆ この期間、原則として職員は学校に不在となります。
- ◆ 緊急の場合は、北部学校教育事務所(944-5978)へご連絡ください。